



TITLE:

<批評・紹介>胡繩武主編「戊戌維新運動史論集」

AUTHOR(S):

深澤, 秀男

CITATION:

深澤, 秀男. <批評・紹介>胡繩武主編「戊戌維新運動史論集」. 東洋史研究 1986, 44(4): 756-762

ISSUE DATE:

1986-03-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/154132>

RIGHT:

胡繩武主編

戊戌維新運動史論集

深澤秀男

本書は、その序によれば、文革後に出了た、研究成果を若手の研究者を中心にまとめたものである。その構成を見れば以下の通りである。

序

胡繩武

戊戌維新期の資産階級啓蒙思潮

戴逸

戊戌維新運動時期的學會組織

李文海

論戊戌思潮の興起及其過程

吳廷嘉

論戊戌思潮の歴史作用

吳廷嘉

戊戌維新时期改革與反改革的鬭爭

李文海

康有爲教育改革思想及實踐

林克光

論譚嗣同的改革獻身精神

王俊義

戊戌政變史實考辨

房德鄰

《戊戌奏稿》的改纂及其原因

孔祥吉

康有爲戊戌年變法奏議考訂

孔祥吉

以上がそのあらましであるが、これから逐次、その内容を紹介し、筆者の感じていることを述べて行きたい。

序では、戊戌維新運動が、日清戦争後の民族の危機の状況下における、康有爲を代表とする維新派運動の愛國救亡運動であり、中國近代史上の第一次の思想解放運動であり、近代中國の經濟、政治と文化思想の發展に大きな影響を生み出しているといわれている。そ

して、中華人民共和國成立以後、中國の史學會は、その研究と史料整理と出版に少なからざる成績をあげて來たが、文革等により、十分進まなかった。その後少なからざる論文が發表され、本書は最近の中國人民大學清史研究所の人達の論文集であるといわれる。

胡繩武氏は、本論文集を四つに分類されている。最初の戴逸氏の論文は、戊戌維新運動の淵源を探索する論文である。李文海氏の第二論文は、戊戌維新運動期の學會を究明し、社會思潮の進行を考察したものであり、吳廷嘉氏の第三、第四論文は、戊戌思潮の興亡の過程と歴史作用を論述したものであるといわれる。

第五論文は、李文海氏のものであり、戊戌維新期の改革と反改革の鬭爭を討論したものであり、林克光氏と王俊義氏の第六・第七論文は、康有爲・譚嗣同の維新派の代表人物の研究であるといわれる。

最後の第八・第九・第十論文は、考證的な性質を持った論文であり、第八論文は、房德鄰氏のものであり、政變の史實について考證したものであり、第九・第十論文は、孔祥吉氏のものであり、前者は、康有爲の戊戌奏稿の改纂について述べたものであり、後者は、康有爲の奏稿を考訂したものであるといわれる。

序を終るに當って、胡氏は、この論集の發行が戊戌維新運動の研究の進歩をうながすだろうといわれているが、筆者も同感である。

第一論文で戴逸氏は、戊戌維新以前の資産階級の啓蒙思想について、一八四〇年のアヘン戦争以後、封建主義思想や帝國奴化思想との對立の中で生れたのが、進歩的な思想の中國の近代の資本家階級の啓蒙思想であり、それは、中國近代經濟と政治の發展の產物であるといわれる。

アヘン戦争時期の思想家であり、社會の矛盾を明らかにした龔自珍、西學の學習を主張した魏源、ついで、第二次アヘン戦争後、變革と西學の學習を要求し、清朝統治の腐朽現象を明らかにした馮桂芬を取り上げておられる。また中佛戰爭前後、薛福成・馬建忠・王韜は、魏源、馮桂芬よりも大規模に西學の學習を要求したが、資本主義の總體的な理解はできなかった。中でも王韜は、西方の立憲君主制の良さを認め、中國においては、人材の育成を唱えた。彼等は、變法自強を鼓吹した點にその功績があった。中佛戰爭以後、何啓、陳熾、鄭觀應、陳虬等も變法論を唱え、資産階級の中國改造案を形成し、戊戌維新運動の直接の先驅となったといわれる。

ついで、資産階級の、君民共主、重商思想について述べ、資産階級が自らに依存し資本主義を發展させたことが述べられている。

最後に戊戌以前の啓蒙思想家の特徴を、次の三點にわたって述べておられる。第一の點では、西方の資本主義の侵略に反對して自ら資本主義文明を習うこと、第二に啓蒙思想家の變法主張は、愛國的事であったこと、第三に彼等は、改革と漸變を主張していた。そして中體西用論が主流であった。しかし、變法期になると、變法運動の理論と歴史を踏まえ、下層知識分子に廣泛に傳播し、變法維新の準備をしたといわれる。

戴逸論文は、我々に、戊戌維新運動以前における資産階級の啓蒙思想について、その發展の經過を明確に示しておられる。

第二論文で、李文海氏は、戊戌維新運動時期の學會の組織を明らかにされている。

まず、維新派は、學會組織を重視しており、康有爲は、西歐の富強の理由を學會にしているといわれる。また、彼等は、學會の作

用を風氣を開くこと、人才を連ねること、民權を伸ばすことにあるとしている。

ついで、戊戌時期の學會の數量と規模を明らかにされ、今まで知られていなかった強學小會等を明らかにされ、強學會等の會員數も資料により、從來の説より確定されている。また、學會の活動内容とその性質を明らかにされ、まず、學會を強學會、南學會など、政治性のある學會、算學會、測量學會など、學術的な學會、不纏足會、戒鴉片會など、社會習俗を改革するための學會に分けておられ、ついで、その性質として、定期或いは、不定期に集會を開くこと、藏書、圖書の閲覽のこと、報紙を出すこと、などがあげられている。

最後に、學會の社會に對する影響を述べておられ、學會の組織が結社の正當性と必要性を明らかにし、封建專制主義の禁令を破つたことに觸れられ、學會の運動が、維新運動を發展させ、それは、辛亥革命時期の立憲團體、革命團體に繼續されたといわれる。

吳廷嘉氏は、この論文において、前述したように、今まで知られていなかった新しい學會を明らかにされ、會員數を資料により、確定している點で新しい知見を切り開いており、學會の分類については、私の分類と期せずして同様であり、間違いないと思われる。⁽¹⁾

第三論文で、吳廷嘉氏は、戊戌思想の興起とその過程について述べておられる。すなわち、維新派が中國の政治舞臺に登場するのは、下開條約以後であり、その特徴は、近代的な報刊、例えば、『時務報』、『知新報』、『湘學新報』等の創辦と學會や報館等による組織作りの展開、嚴復の『天演論』等に見られる社會進化論等による西方の資本主義的な學術文化の紹介であるとされる。

つぎに、戊戌思想の發展について述べ、まず、西方の資産階級の文化特に文藝復興から啓蒙運動にいたる各種の理論や流派や、代表人物、代表作が、『清議報』や『新民叢報』に載せられ、ついで、戊戌思潮の代表的人物により、新民說等の新しい民族主義、國民概念が提出され、戊戌思想の宣傳ならびに啓蒙運動としては、海外においては、『清議報』『新民叢報』等、國內においては、『蘇報』『選報』などが發行されたといわれる。また戊戌思潮の開拓者としては、嚴復、梁啟超等があり、維新派の成長と共に、革命派の發展が見られたといわれる。

最後に、戊戌思潮の衰退は、一九〇三年からであり、拒俄運動、『蘇報』事件の以後とされ、維新派の重點は、政治的な戊戌變法ではなく思想的な戊戌思潮にあると結論づけておられる。

吳氏のいわれる、維新派の活動の重點が、戊戌變法の實施よりも、長い期間にわたって行われたその思潮にあるといわれるのは納得できる。又、各種の報等により、社會進化論や新民說等が宣傳されたというのも正しいと考えられる。また、ここで云われている戊戌思潮というのは、ステイチックなものではなく、變法思想運動というような、よりダイナミックな運動的なものだったのではないかと考える。

第四論文では、吳廷嘉氏が、戊戌思潮の歴史作用を論じておられる。

まず、吳氏は、維新運動を地主開明派である維新派が起した社會運動であり、中國近代の民族、民主改革運動のはじまりであると規定して、その思想文化の發展、社會機構の進展、變化に重點を置いて、述べるといわれる。

ついで、資産階級の社會啓蒙運動を取り上げ、維新派は、西學を啓蒙の武器とし、群治を唱え、各種の報紙を創刊し、自由平等、天賦人權學說を宣傳し、民族主義、愛國主義の概念を提唱し、近代史の第一次の思想解放の潮流を形成し、それは社會運動であつたといわれる。

また、立憲派と革命派の先驅に觸れ、近代資産階級は、戊戌維新運動後、立憲派と革命派に分れ、立憲派は、戊戌思潮を受け繼ぎ地方自治、保路運動で指導的に作用し、辛亥革命においても十一省の獨立を行い、革命派の中にも、維新派から移った者が多く、維新派は、立憲派と革命派の先驅であると云われる。

ついで、維新派は、近代教育の分野では、多くの學堂を建て近代教育史の一里塚となり、文化面では、新聞や出版事業をやり、小説や翻譯小説を書き、詩歌戯曲の改革、口語文運動を行い、學術事業の面では、史學、哲學、自然科學を究め、西學書の翻譯などを行つたといわれる。

最後に維新派が、近代知識分子の隊伍を集結させ、歴史作用をしたことを學會、科學技術の發展、學生數の増大等を通して明らかにされている。また、維新派の影響を受けた人は、五四運動の指導者、中國早期の共產主義分子にも多いことを指摘しておられる。

本論文は、維新派が中國の教育、文化、學術に大きな影響を与えたこと、また、可成りの知識人がその影響を受けたことを實證的に明らかにされていて興味深い。

第五論文は、李文海氏が戊戌維新期の改革と反改革の鬭争を政治的な角度から述べたものである。

まず、その深刻な社會震動を述べ、變法期においては、變法維新

が人々の主要課題となり、當時の社會生活に波瀾を起し、新聞、雜誌などにより、政治を述べ、八股取士の制を除き、封建士大夫に大きな影響を与えたといわれる。

ついで二方面からの改革を阻む力について述べ、第一は、舊制度において、既得権を得ている特權階層であり、彼らは改革によつて損害を受けるからであり、第二は、封建主義の長期の統治の下で造られた體制順應勢力であり、それは、封建統治者階級だけでなく、社會の各層の中に存在しており、封建統治者の愚民政策によつて造り出されたものであり、それをなくすためには、激烈な政治闘争が必要であり、戊戌維新運動もこの中にあるといわれる。

さらに守舊勢力の反改革活動について觸れ彼らは、公然と反對して、變法派を彈劾したり、新政の仕事をサポートし、改革派の奏摺を骨抜きにし、デマを流し、維新派を孤立させたといわれる。

それに對して維新派は、希望が少ししか持てなくても改革を志し、舊勢力に抗して皇帝に迄、變法を説き、その背景には、愛國主義があり、獻身精神があつたが、政治的には、封建制に對して徹底的に反對して行く迄の強さはなかつたといわれる。

以上本論文では、改革と反改革の闘争を特に反改革の具體的行動を通して明らかにしておられ興味深かつた。

第六論文では、林克光氏が、康有爲の教育改革思想とその實踐について述べておられる。

すなわち林氏は、康有爲が一つの資産階級教育理論と教育改革の主張を持ち、成功した教育改革實踐を有しているのでそれらを検討するといわれる。

まず、康有爲が封建教育制度を改革し、資産階級教育制度を推進したことを次の二點から觸れている。第一に科擧制度を改革し、八股取士を廢除したことを述べ、その改革により不徹底ではあつたが、民智を開き、八股文を廢除し、西學を提唱し、人材を登用したことが明らかにされている。

第二に西方資産階級教育制度を推行し、各種の學校を作り、教育を普及し、學生を海外に遊學させ、西方に學ばせ、變法を推進し、學校局、遊歷局を設立し、教育の指導をしようとしたことが述べられている。

ついで、康有爲が學校を創設して教育改革を實踐したことを次の二點から明らかにされる。第一には、萬木草堂を創設し、德育、智育、體育の各方面にわたつて教育し、演說會等を行い、活潑な學生生活を送れるように努力した。第二に桂林に二回講學し、全國各地に學會、報館、學堂を創設し、西學を教えて、變法を推進する人材を養成したといわれる。

結論として、康有爲は、全國に學堂を建て教育改革を行い、中國近代史上有名な資産階級教育家になつたが、科擧制を全面的に否定できない不徹底さがあり、革命運動の發展の中では落伍者となつたと述べておられる。

以上、第六論文では、康有爲の教育改革を丹念に調べておられる。

第七論文で、王俊義氏は、譚嗣同の改革と獻身精神を論じておられる。

まず、譚嗣同と戊戌維新改革運動について述べ、變法運動を早期の資本主義の代表であり、封建制から資本主義への社會改革運動で

あったと規定され、公車上書、變法國是等に觸れ、譚嗣同が、同運動の重要な擔い手であり、特に、湖南變法運動に大きな役割を果たし、深い思想と堅強な鬭爭精神を持ち康有爲を越えていたことを明らかにされている。

ついで、譚嗣同の維新運動中の思想の特色を述べ、第一に彼は、日清戰爭敗北などの中國の歴史の過程の中で、舊きを棄て新しきを圖り、不斷に前進していたことを、『治言』の序や、南學會での講演で同じ意見を出さなかったことなどを通して明らかにされている。第二には、算學館、湘報、南學會や全國各地の學會、學堂の設立に關係し、湖南や全國各地の變法運動に關係している様子が述べられている。第三に改革實踐においては、自分の生命を犠牲にすることをいとわず、身を挺して激烈な鬭爭を行い、思想、理論面では、仁學において、『衝決網羅』を説き、君主專制を批判した。彼は、中國近代思想上傑出した思想家であり、資産階級の民主革命思想の先驅であるといわれる。

最後に、譚嗣同の改革と献身精神については、人を利することを第一義に考え、死をも怕れず、憂國救民に立ち上ったことを述べておられる。

以上、本論文は、譚嗣同の改革と思想について克明に跡づけられている。

第八論文は、房德鄰氏が戊戌政變の史實について考證したものである。氏は、戊戌政變を晚清政局中の重要な事件の一つとしてとらえており、政變後、頑固派が中央政權を握り清朝の滅亡を速めたとされている。

そして、この政變について、次の五つの點について焦點を當て考

證しておられる。第一は政變の日の事についてである。從來政變の日については、初四日説と初五日説と初六日説とがあるが、崇陵傳信錄など各種の史料を検討し、初六日説の可能性を明らかにしておられる。

第二は、政變の原因について從來の説を検討、考察し、直接の原因は、初三日の楊崇伊の慈禧太后に對する訓政の密摺であるといわれる。

第三は、譚嗣同が捕えられた日について、從來の梁啓超の説、譚嗣同の手紙等を比較考察して七日ではないかとされている。

第四は、光緒帝が康有爲に與えた密詔について、康有爲が李提摩太に出した手紙、光緒帝が楊銳に與えた密詔などを比較検討して、康有爲に與えた密詔は偽作であり、これによって康有爲は、海外における自らの地位を有利にしたと云われる。

第五は、光緒帝が袁世凱に賜った密詔について、康有爲、譚嗣同の立場、光緒帝の立場、袁世凱の立場等を史料により考察し、袁世凱が「答諭なし」、としているのを正しいとされている。以上の背景に西太后を中心とする頑固派の強さと光緒帝の動搖と維新派がその後の保皇活動に備えた所があったとされている。

本論文では、康有爲、梁啓超らの史料を綿密に検討し、定説となっている、康・梁の説を批判しておられる。

第九論文は、孔祥吉氏が、康有爲の『戊戌奏稿』について述べたものであり、同書は一九一一年に始めて弟子の麥仲華により、印刷されたものであり、變法期に康有爲が上奏したものと異同があることを明らかにされている。

同書については、一九七四年、黃彰健氏が國家檔案局明清檔案館

編輯の『戊戌變法檔案史料』等により、『康有爲等戊戌眞奏議』という書を著わして検討しているが、史料に限界があり、分析として不十分であるといわれる。また、湯志鈞氏は、その著、『戊戌奏稿輯目』で麥仲華のものが不完全であることを正しく指摘しているが、舊い史料によっている。そこで、孔氏は、故宮博物院珍藏の『傑士上書匯錄』によって検討するといわれる。

孔氏は、次の三點について、康有爲の原摺と『戊戌奏稿』の異同について明らかにされている。『戊戌奏稿』は第一に憲法の制定とその内容を加えており、第二には、維新派の變法時期の政治綱領の制度局を開くを國會を開くに改めており、第三に康有爲が百日維新前後に君權を尊崇した思想を極力掩いかくそうとしているといわれる。また、康有爲の奏疏はその多くが、『傑士上書匯錄』に輯入され、光緒帝の裁決の參考に供したが、『戊戌奏稿』では、その原則性をも改めているといわれる。それは、革命派の攻撃をかわし、清朝に立憲政體を實現させようとしたものであったし、當時の原稿が散失してしまつたからであるといわれる。その結果として『戊戌奏稿』は慎重に引用しなければならぬと結論づけておられる。

以上の論は、新しい證據として『傑士上書匯錄』を引用し、また歴史の經過からも可成り説得的である。

第十論文は、孔祥吉氏が、康有爲の戊戌の年の變法奏議について考證されたものである。氏は、それを中國第一歴史檔案館と故宮博物院の援助のもとに行われたといわれる。

康有爲に戊戌變法期の奏議はどのくらいあるか、その内容は何かということとは重要な問題でまだ解決されていぬといわれる。またこの問題にアプローチした學者として前論文と同じ黃彰健氏と湯志

鈞氏を取り上げ、黃氏の『康有爲戊戌眞奏議』は、比較的精確であるが、檔案資料の限界があり、湯氏もそのままでは必ずしも全部を信じるこのできない『戊戌奏稿』によって『戊戌奏稿輯目』、『康有爲政論集』を書いてるので、それらを參考にして『軍機處檔案』と『傑士上書匯錄』により、先後の順序をつけ、『康南海編目年譜』と當時の人の著作によって、奏議を考訂して行くといわれる。

ここで取り上げられている奏議は、第一の康有爲により、光緒二十四年正月初八日總理衙門に送られ、二月十九日に光緒帝に呈された『上清帝第六書』から、第六十二の楊深秀の八月初五日の摺の附片であり、康有爲に意を授け作られたと疑われている『請探查密藏金銀處所鳩工掘發以濟練兵急需片』までである。それぞれの奏議について前述の著書等によって精しく考訂されている。

ついで、康有爲が文牒に替って草摺した問題にはじまる、康有爲が、意を授けたもの、門人が代筆したもの、附遞者が改繕したものなど五つの問題についても觸れておられるが、紙面の都合もあり、精しく述べる事ができない。

本論文は從來の研究を踏まえ、新資料によって、康有爲の奏議について丹念に考訂している。

以上、本書の各論文を紹介し、多少のコメントを付したが、最後に二、三感じた事を述べて見たい。

第一に、中國において、このような戊戌維新運動に關する共同研究の成果が出たことは最近出版された湯志鈞氏の『戊戌變法史』と共に大變喜ばしいことである。今後、中國においてもこの方面の研究が一層發表されることを期待する。

第二に、このような本が出版されるだけでなく、戴逸氏や湯志鈞

氏等が来日され、中國の研究と日本の研究が交流され、大變有意義であつたが、今後も、日・中及び、世界各國の研究者の研究協力により、戊戌維新運動史が一層解明されることを希望して置く。

なお、筆者の至らなきの故に誤解があるのではないかと恐れる。

註

(1) 拙著『戊戌變法運動史研究』上 四國學院大學東洋史研究室
一九七八年。(第四版)

(2) 拙稿「變法運動と報館」『集刊東洋學』四五 一九八一年。

(3) 湯志鈞氏は、氏の近著『戊戌變法史』(人民出版社 一九八四年)の後記において、本論文について觸れ、新資料を提供し、新問題を提出していると述べられている。

一九八三年八月 湖南人民出版社

A四判 三九四頁 一・六〇元

影山 剛著

中國古代の商工業と專賣制

佐原康夫

本書は著者影山剛氏の三十年に及ぶ業績を収めた書である。内容は書名の示すとおり、中國古代の商工業と都市の研究、前漢武帝時代の鹽鐵專賣制の研究の二つの部分から成っている。ともに著者のライフワークともいふべき研究の集大成であり、學界待望の書と言える。その出版をまず喜びたい。

收められた論考は、古くは一九五〇年代に發表されたものもあるが、全ての章について現在の時點での加筆や訂正、注釋が施されており、事實上新著といつてよい。その構成を大まかに紹介すれば次のようになる。

I 中國古代の商業と商人

II 中國古代における手工業・商業と身分および階級關係

附 前漢時代の奴隸制をめぐる一、二の問題の覺え書

III 中國古代の鹽業の成立とその展開

IV 中國古代の鹽業の生産組織と經營形態

——主として專賣制以前に關して——

V 前漢朝の鹽の專賣制

VI 中國古代の製鐵手工業と專賣制

補論

VII 後漢朝の鹽政に關する一、二の問題

VIII 鹽鐵專賣制施行の時期、その他專賣制初期の諸事情

附 鹽鐵論について

IX ト式について

X 漢代の經濟觀と中國古代商業および古代專制國家の經濟政策をめぐって

XI 中國古代における都市と商工業

多岐にわたる本書の内容を詳細にたどることは容易でないが、大きく分ければ、I—II章・X・XIの各章は商工業と都市について、またIII—IX章は鹽鐵專賣について論ぜられている。以下テーマに従つて章の順序にはこだわらずに紹介しよう。

まずI章「中國古代の商業と商人」は本書全體の序論にあたる。